

# 発達教育センター所長挨拶

所長 森 孝一



最初の挨拶として、私なりの特別支援教育の基本を述べます。私は、特別支援教育を「わかりやすさ」と「あたたかさ」を与える教育であると考えています。その基本は、まず、「**家庭（保護者）を支える**」ことであり、ます。以下、3点に集約しました。

## (1) ホスピタルショッピングの哀しみ

障がいの存在を疑われる我が子を抱きしめ、診察を待つ。その時、保護者はどんな思いで待っているのだろうか。さぞかし、心細いことだろう。「障がい」の告知はある面で、「癌」の告知よりも無情である。癌には、実施できる医療が少なくともある。「障がい」の場合、告知後のケアが不十分なため、放置状態になりやすい。ホスピタルショッピングは、診断された後、どうやって育てていけばよいか分からない母親の「生きる」希望を求めての苦悶の行脚である。この哀しみを、特別支援教育に携わる人は十分に理解してほしい。

## (2) 教育現場におけるインフォームド・コンセント

見捨てられた感を持つ保護者、その時に前向きに語れる人がそばにいるかいないか、それがその後の子育てに大きく影響することは想像に難くない。絶望が閉じこもりを生み、時には我が子や自分の命さえ投げ出す事件が起きる。星野氏は、文化的・歴史的背景を持つインフォームド・コンセントを日本に馴染ませるために『医療の倫理』という著書の中で、次のように述べている。「**倫理的規範として、患者を慈しみ、情のある対応をして、患者の身になって考え、患者の希望を生かした医療を心掛けていけば、自然と患者の方から医師を頼り信頼するようになる。患者に信頼されれば、医師もそれに応じて、全人的な医療を心掛けるようになり、医師と患者の人間的なつながりが深まり、よい医療ができるようになり（略）・・・**」

引用した説明文の中、医師を教師に、患者を子どもや保護者に、医療を教育に置き換えて読んでほしい。

## (3) 「全人的」ということ

「全人的」という言葉の意味を考えるために、中村氏の著書『臨床の知とは何か』から参考となる部分を紹介する。

「医療において患者は弱い立場にあるといったが、それはとりもなおさず、患者が人間のパトス（受動、受苦、痛み、病い）という性質をもっともよく体現しているということである。われわれは人間である以上（中略）どうしてもパトス性を帯びざるを得ず、その点では医者にしても例外ではない。（中略）ところが、現代の医療ではそのような事実を目をつぶり、現実には背を向けるかのようにパトスを軽視し、特に＜痛み＞の抹殺をおこなっている」教師も、障がいのある児童生徒やその保護者のパトスに対し、鈍感になっていないだろうか。教育的支援を進める際にこのパトスを軽視することがあると保護者の信頼どころか、哀しみや怒りを増幅しかねないことを肝に銘じてほしい。

以上の3点を踏まえ、教育の心を持って教育行政に携わってまいります。